

愛にめぐりあう予感

森瑤子





愛にめぐりあう予感

〈著者紹介〉

森 瑤 子（もり ようこ）

昭和十五年、静岡に生まれる。
六歳の時よりヴァイオリンを習
い、昭和三十七年、東京芸術大学
器楽科卒業。

アイバン・ブランクソン氏と結婚、
三女の母。

昭和五三年、『情事』で第二回
すばる文学賞受賞。著書に『誘
惑』『嫉妬』『傷』『別かれの
予感』『招かれなかった女た
ち』などがある。

愛にめぐりあう予感

定価九八〇円

昭和五十七年八月十日 初版発行
昭和五十七年九月十五日 四版発行

著 者 森 瑤 子

発行者 村 川 修二郎

発行所 主婦と生活社

振替東京〇三—三六三六四

印刷所 松濤印刷株式会社

太陽印刷工業株式会社

製本所 小泉製本株式会社

東京都中央区京橋三丁目五番七号 千一〇四
TEL 販売部（五六二）二六五一 編集部（二七二）一五三〇

© Yoko Mori 1982 Printed in Japan

（落丁・乱丁本は、お取替えいたします）

目次

五月の夜、私は

指輪

砂の翼

マンシヨン

暗い鏡

愛の予感

165 131 103 55 35 5

裝
丁
東
逸
子

愛にめぐりあう予感

五月の夜、私は

街には夕暮れ時の騒ざわめがあり、微かすかな光の残滓ざんしと、始まったばかりの闇とが混まじり合うその底で、ネオンサインがひっそりと瞬またたいていた。透明な蒼あおさを湛たたえた暮色の中を、柔らかな風が吹きぬける。夜の訪れを告げる風。遙かなる宇宙の草原から吹きこんでくる、香かぐわしい五月の風。

一日の中で、胸を締めつけられるのは、たいていこの時刻だ。暮色の蒼さゆえに、風の甘さゆえに、特に初夏の黄昏たそがれどき時の美しさゆえに、そして――。

――そして孤独ゆえに。

しかし私はこの感覚を孤独と名づけるべきではないかもしれない。なぜなら、それは敗北感を抱かせるから。

多分、自由、あるいは解放と呼ぶべきなのだろう。自分から進んで求めたのだし、それを手離さないためにながと続いた、苦惱に満ちたあの葛藤の日々を思えば、むしろ今宵私は、勝利の杯さかづきを掲げてしかるべきではないか。

乾杯？　いったい誰と杯を合わせるのだろうか？

——もちろん、自分自身と。

並木通りまで来て、勤め先に電話を入れ、社には寄らず直接八時にスタジオに行くから、と伝えた。電話に出た同じ C F 制作室の吉見は、オーケイと言ひ、いくつかの伝言を素早く読み上げた。主として今夜のフィルム撮影に関するものだった。

「フィルム撮りのあと、打ち合わせが入っているよ。ロダンで。これは課長の伝言」

フィルム撮りのあと？　とすると今夜も帰りは十二時を廻わってしまふ。だしぬけに亮の不機嫌な顔が浮ぶ。——俺はおまえさんのように芸術家じゃないからね、そういう不規則なリズムにはついていけないよ。——

芸術家を長くひっぱるように発音して皮肉を言われているうちはまだ良かった。そんな仕事さつさと止めちまえよ。たかがコマーションだろ、くだらねえよ。そう吐き捨てるように言ったことも、何度かあった。(ばかね、あのひとはもう、二カ月前から仙台じゃな

いの)

コインが落ちる音がしたので、無意識に新しい十円玉を入れながら、暗さの増した皇居の方角の、星のない夜空を眺めた。仙台では、きつと星が零れるほど、見えるだろう。

——八月には来いよな、七夕、一緒に見よう。

何もかも終ったあとで、彼はぼつりと言った。

「それから長沢ってひとから電話。用件は別にないみたいだな」

「長沢？」

私は意識を受話器の中の声に戻しながら訊いた。

「それ何時頃かしら？」

「ええっと——、あれ、書いてないな。受けたの大ちゃんだけど、彼Nプロへモデルの打ち合わせに行ってるから」

「そう、いいのよ。伝言、それだけ？　じゃあとでね、ありがとう」

電話を切ると、ザラザラと音を立ててコインが五、六枚戻ってきた。いつのまに入れたのか、まるで記憶にない。何かが気持ちにひっかかっていて、私は上の空でそのまま地下鉄の入口まで歩き、階段を降りた。

夏になると、地下鉄特有のむっとする厭な熱気と臭気が立ち昇ってくるだろう。東京は

どこもかも埃^{ほこり}っぽくて悪臭^{あくしゅう}がし、そして堪え難く暑苦しくなるのだ。俺と行こうよ、あっちの方が空気がきれいだし、夏は涼しいし、冬にはスキーが楽しめるからさ——。

亮^{あきら}は何百回も言葉を尽^{つく}して説得しようとした。一緒に来てくれ、頼むから俺について来いよ。そして最後にはいつも口論になり、それが縫^ぬれてどうしようもなくなると、彼の右手が、彼の本当の意志とは無関係にとんできて私の頬を打ち、不毛な喧嘩に止め^{とど}めを刺すのだった。話し合いで始まった会話は口論に発展し、暴力と涙で終る日々が続いた。

階段を降り切った所で私は立ち止まって苦笑した。たった今八時からの仕事の打ち合わせをしたばかりなのに、足は無意識に家に向かっている。

平穩だがとても虚^{から}っぽな部屋。私を待つひとがいけないというより、私には帰ってくる男^{おとこ}が、もういないのだ、ということの方が辛い。つい二カ月前まではいた。それからずっと遡^{さかのぼ}って、四年の間私のところへ帰ってきていた亮^{あきら}がいた。

ディレクターの吉見が言っていた長沢とは、どの長沢のことだろうか？ その名の人間をふたり知っているが、咄^{とつぎ}嗟にどうしてか男か女か尋ねられなかった。女なら囑託^{しよくたく}でスタイリストをしている長沢由美子だし、男だとしたら雄一郎だ。

亮^{あきら}が何か話して行ったのだろうか？ 男同士の友情には、女が窺^{うかが}い知ることのできないことが、あまりに多い。

大学を卒業した翌年に、私は長沢雄一郎と婚約していた。岩井亮は彼と同じ建築事務所に勤めていた。

私たちが三人で伊豆の海で休暇を過ごした夏、まだ誰もが若く、陽気で闘争的で、しかも自分たちに自信がなかった。それまでに亮とは二度しか会ったことはなかった。雄一郎とは正反対の、臆面のないどちらかといえば傲慢な印象が強い若者だった。

最初の日から一度に太陽にあたりすぎた雄一郎が、ひどい日焼けをしてしまい、強過ぎる日射しを避けて宿に残った午後、亮は、雄一郎というと言う私を強引に海へ連れ出した。海岸で、私たちはふたりとも紫外線に強く、皮膚は赤くなるかわりにどんどん小麦色に焼けていく、といった同じ体質なのを発見して笑いあった。

「俺たちは同類だね」

と亮が言った時から、警戒と同じくらいの好奇心が芽生え、私は半ば、あまりに感覚的で雑駁な神経を持ったこの建築家の卵に反感を覚えながら、同時にずっと以前からよく識っていたのに、その日まで真の意味で出逢わなかった、非常に懐しい男を見る思いに打たれて胸騒ぎを感じていた。

白砂が眼に痛いほど輝き、七月の初めで人影はなく、お互いの肌の焼ける健康なにおいと潮の香りとがあった。

「俺、なんだか君が好きだな」

と、唐突に亮が言った。溜息ためいきのようでもあり、呻き声うめのようにも耳に響く声で。

砂の上に腹這いになっていた私の肩や背に、敵しい陽光が重くのしかかる。私たちは微笑も浮べないでお互いの顔をみつめあった。

「私も」

と、私は彼と同じように軋きしんだ声で囁いたが、海上から軽やかに吹き寄せてきた一陣の優しい風が、その言葉を掠さらめ去っていった。

途方に暮れて、私は自分の胸に問い糺ただした。

——私も、ってどういうことなの？ 雄一郎の親友として彼が好ましいという意味なの？ それならなぜ私の心はもっと陽気でないのだろう。

目の前に拡がる真夏の情景でさえも、フィルターをかけたように、急にひっそりとかげって見える。胸の中にはどうしたことか物哀しさだけがあった。

恋が始まろうとする時の、あのひたひたと押し寄せる悲しさ、鼻の奥に淡い樟脳しょうのうの香りに似た郷愁を呼ぶにおいがたちこめ、顚顚てんてんのあたりは期待と不安の入り混じった霧が漂っているのだった。

私は、無造作に投げ出された、砂の上の亮の日焼けした手を眺めながら、もう一度声に

五月の夜、私は

だして言った。

「私も。……あなたが好き」

その骨張った手の上の薄い皮膚はいかにも美しく、それでいて労働者のように力強く見えた。その手は亮自身とよく似ていた。

ゆっくりと過ぎていく時の流れがあった。彼の眠たげな手のずっと先に、真夏の海が残酷な青さをたたえて横たわり、私たちはもう一言も口をきかずに、まるでふたつの死体のようにいつまでもじっと横たわっていた。緊張に堪えながら、息たえだえに――。

その夜、夕食のずっとあとで、ひどく疲れていたのに誰も眠れずにいた時、亮が散歩でもしようかと言った。

雄一郎と私の両方に声をかけたのだが、眼はまっすぐ私の瞳の中を覗きこんでいた。昼からずっと読み続けていたフォーサイスのスパイ小説から眼を上げて、雄一郎は私と亮の視線が一瞬ではあったが絡むのを、見逃がさなかったのにちがいない。

なぜならそのあとすぐに、私が

「一緒に行かない？」

と誘った時、彼は

「僕は止しとくよ」

と言って、さりげなく本の上に視線を戻したのだが、その横顔は硬張^{こわば}ってわずかに蒼ざめていたし、止しとくよ、と言った調子が、あまりにもさりげなさすぎたから。

私はあの瞬間の雄一郎の眼の色を、生涯忘れることはできないだろう。彼は亮と私の一瞬の眼くばせで、すべてを察したのだ。—— 私たちでさえまだ定かでなかった何かを。そして雄一郎の瞳の底に、私は更に了承の色を、許しを認めたと勝手に思った。

漆黒^{しつこく}の動物のように蠕^{うね}る夜の海。潮風はその海が吐きだす香^{かぐ}しい溜息だ。私たちの宿命—— 私たちが共通に愛するひとりの男、雄一郎を裏切ることなしには実らせることのできない恋を思つて、亮と私は長いこと声もなく立ち尽^{つく}していた。

波打ち際に夥^{おびただ}しい夜光虫が砂金のように輝き、レースのような優しい波に手をつける、私の手の甲や指先が銀色の粉をふいたように、幻想的に輝きだすのだった。

その指で私は、潮風に乱れた髪を梳^すき上げ、とめどもなく流れる涙—— たくさんの理由によつて、それは私の眼の中に溢れだしたのだが—— を、拭^{ぬぐ}った。すると傍で亮が息をのみ、感情を抑えるあまり震える声で囁^{ささや}いた。

「きみは天使みたいだ。きらきら光って妖精のようだ」

私は夜光虫で輝いている両手を眺め、自分でも信じられないくらい優しい仕種^{しぐさ}でそっと亮の頬に触れた。するとそこがぼうっと微^{かす}かに光った。

彼の手がふいに伸び、私は日向ひなたのにおいのする胸に抱き寄せられ、苦悩に満ちた、だが星のようなふたつの瞳がゆっくりと私の上に降りてくるのを見ていた。

温い乾いた唇が、私の口に重なり、ふたつの胸の鼓動がひとつになって、お互いの肉体の空洞に共鳴した。それから私たちは少し震えながら離れた。亮の頬や唇の上に星を砕いたような銀粉が残った。

「あなたも今夜、天使になった」

と私は掠さられた声で言った。喉のどに熱い塊かたまりがこみあげ、私は何時しか噤しずり泣いていた。宿にひとり残った雄一郎を思つて、亮のせいで、接吻のせいで、そしておそらくは世にも美しいこの海辺の夜のせいで、声もなく泣いた。

その後、雄一郎と亮の間に何らかの話し合いが行なわれたかどうか、私は知らない。

休暇の最後の夕方、雄一郎と私はふたりだけで海岸を歩いた。私は薬指から小さなダイヤモンドの指輪を外して、彼に返した。

それはなんと憂鬱な一時だったろう。私は新しい恋のことで精一杯だった。惨めなことに、それを雄一郎の眼に隠すことすらできなかった。

「それでいいんだよ」

と雄一郎が言った。手に今では不用となった指輪を固く握りしめて。

「もし君が悲しいふりなんかしたら、僕はずっと苦しむよ」

その時不意に雲が切れて、その鋭い亀裂の中から金色の光が海面を貫いた。すると、それまで蒼紫に静まっていた海が、水平線の彼方から津波のように金色に染まり始めた。その日没の海に向けて、何を思ったか雄一郎は手の中の指輪を力一杯放り投げた。そして振り向いて誰にもなく言った。

——ひとつの終りと、別のひとつの始まりだ。

あの指輪は、今でもあの海底にひっそりと沈んでいるのだろうか。あれから四年がたった。私たちは二度とふたりで会うことはなかった。男同士のつきあいは続いたらしかったが、やがて雄一郎は大阪支社に移って行った。自ら希望したものか、偶然かわからない。ソニービルの地下から再び夜の街に昇って行きながら、私は自分にかかってきた電話のことを考える。

はたして雄一郎だろうか。由美子の可能性の方が実は多かった。今夜のCF撮影スタッフに彼女が入っていたから、おそらく指定しておいた小道具の何かが手に入らないとか、そんな用件なのだろう。